

## 〈花筐〉達成論の更新

西村 聡

はじめに

世阿弥晩年の〈花筐〉は〈班女〉と並ぶ物狂能の最高傑作、あるいは女体能の到達点と評される。世阿弥作品史への位置づけは、狂女物としての典型的な構成<sup>(1)</sup>、情趣表現による作詞の洗練<sup>(2)</sup>、芸能者の面影の後退<sup>(3)</sup>、などを視点とする精密な検討が進み、その範囲に新たに異論を差し挟む余地はなさそうである。本稿もそれらの先行研究に追隨して、結論では高い評価を強化したいと考えている。

しかし〈花筐〉の舞台を見るなり、詞章を読むなりして感じるのは、むしろ類型化を拒む個性の強さであり、評価をためらわせる問題の多さである。注釈書を含む先行諸論に解決を求めても、問題が問題として認識されていなかったり、そういう説明では評価が逆になるのではないかと疑われたりして、判断材料が整わないのに高い評価が先行している印象が否めない。

詳しくは後述するが、8段の李夫人の曲舞を例に取り上げておこう。狂女物の典型的な構成では、シテが恋慕の相手と再会するのは結末であり、結末に至るまでシテは相手がその場にいることを知ら

ずに物狂いの芸を繰り出し続ける。物狂いの芸は結果として再会をもたらすが、物に狂っている最中は恋慕が募り、悲嘆を基調とするのが普通である。〈花筐〉の李夫人の曲舞も、幸福な結末の直前に置かれ、再会を決定づける働きをしているものの、曲舞の芸を始める前の7段には、狂いの芸を所望する相手の言葉があり(宣言を朝臣が伝える)、「嬉しや(中略)いざや狂はん」と応じるシテの口吻には、再会(対面の実現)を確信する響きが感じられる。

6段「クルイ」の「狂気」から、シテの狂いは明らかに転調して、ここでは自身が御幸の先払いを任ずる気である。その変化に注意するならば、8段の曲舞を「狂気」の延長、愁訴の連続ととらえることはできない。曲舞愁訴説(それが注釈史上の通説)では、シテの狂女が愁訴を通し、勢いにたじろいで相手(継体天皇)が愛人を認知したことになる。氣丈夫なシテの狂女が気弱な子方の天皇を説き伏せて、いわば押しかけ女御の座に納まる能であつては、室町末期以来行われた「はかり事」の物狂い<sup>(4)</sup>、説と大差なく、そういう作品理解と高い評価は両立し得ないと思われる。

つまり〈花筐〉の場合は、評価の前提となる作品理解が、この問題を一例として、部分ごとにも全体的にも、いまだ作品の水準に到

達していないと見るべきであろう。傑作が傑作であることの証明には、従来指摘の構成論的、また表現論的検討に加えて、少なくとも以下に述べる諸問題の解決が、さらに必要になると考える。

### 一 古形は国母誕生の物語

〈花筐〉結末の9段は「掛ケ合」と「哥」から成り、日本古典文学大系『謡曲集上』（底本は下村識語本。以下、詞章の引用は同書による）に従えば、その内容は

9 シテ・子方の対面＝花筐を捧げ、伴われて都へ。（掛ケ合＋「哥」と要約される。また光悦特製本を底本とする新潮日本古典集成『謡曲集下』では、「掛ケ合」と「哥」の始め（君の御心ぞありがたきま）で）を

9 シテ・子方の対面 花筐を介しての喜びの対面。（掛ケ合＋「哥」冒頭）

そして「御遊もすでに」以降の「ノリ地」を

10 結末 玉穂の都への還幸。（ノリ地）として、二段に分割している。

「花筐を捧げ」る「掛ケ合」はともかく、対面したシテと子方が都へ帰るとされる下村本の「哥」と光悦本の「ノリ地」は、しかし同じ内容ではない。玉穂の都への還幸を明言する「ノリ地」に対して、「哥」では継体天皇の心の広さを称えたのに続けて（ここまでは光悦本も同文）、シテがやがて安閑天皇を産み、女御に格付けされたことを伝える形になっている。そのように要約すべきところを、大系は

「ノリ地」の類型に影響されて（現行諸流の「ノリ地」を「哥」の後に付記、「伴われて都へ。」という結末に組み違えたらしい。

二つの終わり方を比べると、「ノリ地」はシテに距離を置き（ここへ来てシテが後退、あるいは行列に埋没する印象がある）、淡々と還幸を描写するように見えるが、「哥」は後日談まで視野に入れて、シテの幸いの輝かしさを強調している。

この一篇の物語を総括して「形見の女御」——安閑帝の御母の事蹟と断定して筆を止めているわけだ。これもある意味では、事物の起源を説く行き方と似ている手法であって、結句が類型化されていないことと相俟って、この曲の本来の形であったのかも知れない<sup>50</sup>。

と言われるとおりであり、「哥」は室町期の古写本や『宗節仕舞付』がこれに拠り、車屋本にも「昔のきり」（毛利本）、「又きり」（下間本）と称して付記している。現在はこれを小書の「安閑留（女御留）」にとどめつつ、常は「ノリ地」を採用する。古形の「哥」に代えて「ノリ地」を作ったのは観世弥次郎長俊作との伝えがあり（妙庵本）、集成はその動機の一つに〈芦刈〉型の応用が試みられた可能性を想定している。

しかし結末をことさら類型化した理由は、〈芦刈〉型への志向というより、まずは「哥」の内容では不都合があるとの判断が働いたと考えられる。それがどういう不都合かは分からない。ただ車屋本と同じ頃の注釈書、『謡抄』の「てるひのまへ」の注に、

花がたみの昔のきりに、安閑天皇の御母、照日の宮と申しは、形見の女御の御事也とあり。然ば、尾張連草香女目子媛也。（日

と書かれてあるように、安閑天皇の生母ならば目子媛のはずであるが、『日本書紀』によれば即位直後に迎えた後は手白香皇女(目子媛は「元妃」と呼ばれる)、生まれた皇子は後の欽明天皇であり、当時、後の安閑天皇は齢四十を越えていた計算になる、たとえばそういう継体紀記述との齟齬が気になったか、あるいは国母の誕生に「狂気」の、しかも「はかり事」の果たした役割が大きいとすることが憚られたのか、いずれにせよ穏やかな類型の中に、「ノリ地」への改作は、古形の持つ物語的迫力を溶解させる結果となった。

シテが国母に上り詰める「哥」を結末に置くことで、その前の物狂いの苦難が英雄化され、照日の前は申し子ではないにしても、名前の似た天照大神の加護に夫婦であずかる。そう見れば、いかにも中世的な本地物の骨格を、〈花筐〉は本来備えていたことになる。

「筐の女御」のいわば前生譚を統一するのが、仮作の狂女照日の前であり、子方の継体天皇に代わって継体即位紀を再構成する、目子媛でも手白香皇女でもない、強烈な個性が新たに出現したと言えよう。

## 二 継体即位紀への中世的関心

継体即位紀に関する世阿弥の知識は、直接『日本書紀』に依拠したのではなく、北畠親房の『神皇正統記』から得られたかとされる(集成。『神皇正統記』への言及は『謡曲拾葉抄』が左の④を引用して早い)。集成が頭注に抜き書きする部分を整理すると、

- ① 応神天皇五世の孫であること。
  - ② 男大迹王と呼ばれたこと。
  - ③ 即位前は越前国に住んだこと。
  - ④ 武烈崩御後、皇胤が絶え、群臣が探し出して帝位に迎えたこと。
  - ⑤ 即位後は大和の磐余玉穗の宮に住んだこと。
- の五点になる。

①②は継体紀の冒頭に、男大迹天皇は蒼田天皇(応神天皇)の五世の孫、彦主人王の子であるとのみ記し、『古事記』は品太天皇(応神天皇)五世の孫、すなわち袁本(本居)宣長が「さて書紀に此に此五世の世系を、具に挙るべきことなるに、たゞ五世とのみあるは、いと粗し」(『古事記伝』四十四之巻)と批判したとおり、間の系譜が不明で数え方も不確定、『神皇正統記』と同じ系譜を掲げる慈円の『愚管抄』巻第一には、「五世トトル事ハ、応神ヲ加テ数歟。除之歟。」とのとまどいも表明されている。

それだけに、③とも併せて皇位継承の正当性に疑念が生じるとしたら、④の経緯が縷述されなければならない。『日本書紀』は継体と資格の同じ倭彦王(仲哀五世の孫)との交渉の失敗例まで用意して、比較して継体即位の必然を説得しようとし、『神皇正統記』でも選ばれてふさわしい「王者ノ大度」、「謙讓」の姿勢が強調されている。「五世王」は「皇親の限りに在らず。」(『令』巻第五継嗣令第十三)と定められたのを、文武天皇の詔により、「籍を絶つ痛に勝へず」、これに「在らしめ」たほど(『続日本紀』巻第三)、そもそも境界的存在であり、継体紀の「五世の孫」の書き出しは、それがぎりぎりの選択であることを意味した。

そして継体即位の物語は、後世、皇位継承が混乱するたびに、継承者の選択を正当化する目的で回顧されてきた。たとえば平家が都落ちした寿永二年（一一八三）、平家の奉ずる安徳天皇を廃して都方で後鳥羽天皇を擁立するとき、劍璽を持たずに踐祚する先例を継体天皇に見いだし、これに「准拠」しようとしたことがあった（九条兼実『玉葉』卷二十八）。さらに後鳥羽の孫、後嵯峨天皇の即位にしても、承久の乱の首謀者の皇統が復活できたのは、乱後二十一年、別系の後堀河・四条の皇統が絶えたことによるのであり、草深い古御所の貧窮から選出された後嵯峨天皇に継体天皇の旧例が思い合わされるとした『保曆間記』は、その運のめでたさを賀茂・八幡の御利生と解く噂のあったことも伝えている<sup>(7)</sup>。

賢王を選ぶ群臣の沙汰が「神明ノ冥」を反映しているとの見方は、『愚管抄』卷第七にも、光孝・光仁・継体の各天皇を例として、

コノ君イデキ給テ、コノ日本国ハ始終メデタカルベシト云道理  
ノヒシトサダマリシカバ、コレニヨリテ神明ノ冥ニハ御サタアル  
ニカハリマイラセテ、臣下ノ君ヲ立マイラセシナリ。サレバ  
アヤマタズコノ御門ノ末コソハミナツガセ給テ、ケフマデコノ  
世ハモタヘラレテ侍レ。（日本古典文学大系本による）

と示されている。「コノ君」の一人、継体天皇の事蹟を略記する同書卷第一には、

武烈ノ後王胤絶了。越前国ヨリ此君ヲ迎取マイラセタリ。群臣  
ノ沙汰也。

と記し、選択が正しかったことは、同じく同書卷第三に、（五十八歳で即位しながら）治世二十五年の長きを保ち、地方の民情に明るい強

みが国政に発揮され、皇子三人が次々に即位して皇統を守った、という評価で確認できるとしている。

⑤の都の所在地については、『日本書紀』は河内の樟葉宮<sup>くすはのみや</sup>で即位、五年十月に山背の筒城（綴喜）、十二年三月に山背の弟国（乙訓）に遷都した後、大和の磐余玉穗宮に入ったのは二十年九月とする。『扶桑略紀』第三もこれに従い、『水鏡』も「この御時都うつり三たび有りき。」とするが、『簾中抄』上・『愚管抄』卷第一・『歴代皇紀』卷一は磐余玉穗宮から山城（筒城）へ、山城からまた磐余玉穗宮へ遷都したとする。その間、任那四県を百済に割譲したり、磐井の反乱<sup>け</sup>・毛野臣<sup>なのおみ</sup>の渡海があるなど、事の多い治世二十五年であったが、後世の関心は専ら即位の事情に集中し、遷都を繰り返した背景は詮索せず、治世終焉の地を冠して国風諡号風に「伊波礼宮治天下乎富等大公主」<sup>(8)</sup>（『新日本紀』）と呼ぶこともあり、自然と磐余玉穗宮一所が残ったのであろう。

さて『神皇正統記』が世阿弥の継体紀理解の源泉であったと考えられるのは、集成が抜き書きした①から⑤の部分よりも（それらは前掲諸書にほぼ共通した常識的理解と言える）、

⑥ 手白香皇女を皇后としたこと。

を挟んで、継体天皇が即位後、「賢王」の役割を立派に務めたこと、応神天皇の皇子の内、「賢王」仁徳の末は絶え、第八皇子隼総<sup>はやぶさむね</sup>別の末がこうして皇位を継承したのは、大鳥隼の名前が小鳥鷓鴣<sup>こどり</sup>（仁徳の名前は大鷓鴣尊）に勝つてのことかと述べた後、次のような見解を付加しているからであり、この部分こそが『花篋』における天照大神信仰の利用に道をつけたと考えられる。

此天皇ノ立給シコトゾ思外ノ御運トミエ侍ル。但、皇胤タエヌベカリシ時、群臣扱求奉キ。賢名ニヨリテ天位ヲ伝給ヘリ。天照太神ノ御本意ニコソトミエタリ。皇統ニ其人マシマサン時ハ、賢諸王ヲハストモ、争力望ヲナシ給ベキ。皇胤タエ給ハンニトリテハ、賢ニテ天日嗣ニソナハリ給ハンコト、即又天ノユルス所也。此天皇ヲバ我国中興ノ祖宗ト仰ギ奉ルベキニヤ。(日本古典文学大系本による)

皇胤が絶えかけたときに神の意志が働いて群臣に賢王を選び求めさせた、という見解は『愚管抄』に通じ、『保曆間記』の後嵯峨天皇を連想させるが、その神を天照大神に特定するものは、『花筐』以前にはこうして『神皇正統記』一つしか探せない。継体天皇は即位の前に賢名あり、即位の後にも賢王の聞こえが高い。しかしその賢政を、『神皇正統記』は逐一列挙せず、継体天皇が天の許しを得て即位し、皇統断絶の危機を救った事実をもつて、「我国中興ノ祖宗」と称えている。つまり継体天皇にとっては安閑天皇以下の父祖たること、後世から振り返れば何より賢王の証明となるのである。『花筐』において継体天皇が天照大神を信仰したとし、結末に安閑天皇の名前を出すのは、『神皇正統記』に照らせば必然的な設定であり、「哥」から「ノリ地」への改作は、設定の意図を見失った改作と言わざるを得ない。

### 三 〈花筐〉における継体即位紀の再構成

世阿弥は『神皇正統記』を参看して、⑥により継体天皇には手白

香皇女という皇后があり、また続く安閑天皇に関する記述によりその母が目子媛であることも、もちろん知っていた。その上で、第三の新しい女主人公を創作したことになる。天照大神に通じる照日の前(安閑を産んで照日の宮)という名前、皇后でも元妃でもない女御という位<sup>8)</sup>は、継体の即位、安閑への皇位継承を、天照大神の「御本意」として受け止める周到な仕掛けであったと見たい。実在の目子媛では物狂いにして憚り多く、別に皇后がいては話が複雑になる。要するに、皇位が無事に継承されれば、国母は誰であつてもよく、天照大神の面影を背負って、継体即位紀を思い切り中世風に荘厳するのが、狂女照日の前の役割と言えよう。

新しい女主人公を論じ出す前に、名前の変わらない男主人公の方は、①から⑤まで中世の常識の範囲に収まるかどうかを確認しておこう。①②③については、

ア、かやうに候ふ者は、越前の国味真野と申す所にご座候ふ大迹部の皇子に仕へ申す者にて候、(1段「名ノリ」。ワキツレの使者の名乗り。)

イ、われ応神天皇の尊苗を継ぎながら、帝位を踏む身にあらざれども、(3段「文」。置き手紙の文面。主語「われ」は継体天皇。)

ウ、忝なくもこの君は、応神天皇五代のおん末、大迹部の皇子と申ししが、(4段「サシ」。ワキの官人による紹介。)

エ、忝なくもこの君は、応神天皇五代のおん孫、過ぎし頃まで北国の、味真野と申す山里に、大迹部の皇子と申ししが、(6段「問答」。シテの照日の前とツレの侍女による「この君」の紹介。)

と見られるとおり、①は当人の自覚も周囲の認識も顕著にあり、②

は「男大迹」を「大迹部」と表記し、「をほど」ではなく「おほあとべ」と訓ませるが、「大あとべ」とよみたる事は、何の記にもみえず「謡抄」、世阿弥が②を知りつつ「訛称」（集成）を用いた理由は分からない。③は『日本書紀』に継体天皇は越前国三国の坂中井（さかなかい）生まれ、父彦主人王の死後は母振媛（ふるひめ）の郷里、同じく越前国高向（たかむき）に住み、群臣の迎えを受けたのは三国であったとされる。中世の史書は越前国内の地名に関心を示さず、どれも越前国に住んだとするのみで、そのことが〈花筐〉における味真野への着眼を許したと思われる。

次に④については、右のアイウエそれぞれの続文に、

ア、きのふの暮れほどに都よりおん使ひあつて、武烈天皇のみ代を味真野の皇子におん譲りあつて、おん迎ひの人々まかり下りおん供申し、けさ疾くご上洛にて候、

イ、天照大神の神孫なれば、毎日に伊勢を拝し奉る、その神感の至りにや、群臣の選みに出だされて、誘はれ行く雲の上、

ウ、当年ご即位収まりて、継体天皇と申すとかや、されば治まるみ代のみ影、日の本の名も合ひに合ふ、大和の国や玉穂の都に、いま宮作りあらたなり

エ、今はこの国玉穂の都に、継体の君と申すとかや

として、「武烈カクレ給テ皇胤絶ニシカバ」『神皇正統記』という事情には触れず、「群臣の選み」とはいえ、武烈天皇からの譲位の印象（9段「哥」にも「み国譲りの程もなく（安閑天皇が生まれた）」とする）を一方で与える表現を使用している。「きのふの暮れ」に使いが来て、「けさ疾くご上洛」という決断の早さも、「三タビマデ謙譲シ給ケレド、ツギニ位ニ即給フ」『神皇正統記』慎重さとは、やはり印象が異なる。

『日本書紀』では三国を出発するまでに「留まること二日三夜」、樟葉宮に到着してもまだ、継体天皇は辞退を繰り返している。〈花筐〉では玉穂の都がすでに存在し、そこへまっすぐ上洛して、皇居だけを新しく造営するらしいのも、譲位の印象と関係があるろう。少なくとも、『日本書紀』のように河内・山城を二十年も転々としていたのでは話が進まない。

イにいう毎日の伊勢信仰も、前掲の前文と続けて読めば、「帝位を踏む身にあらざ」る現状に甘んずる姿勢よりは、現状を打開する願いなり、むしろ意欲の現れさえが感じられる。継体天皇の即位は思いの外の「御運」と見えて『神皇正統記』、照日の前の眼に焼きついたのは、

この君いまだその頃は、皇子のおん身なれど、朝ごとのおん勤めに、花を手向け礼拝し、南無や天照皇大神宮、天長地久と、唱へさせ給ひつつ、み手を合はさせ給ひし、（6段「クルイ」）

という秘儀の姿であり、それは越前時代の継体天皇が天照大神の「御本意」（イにいう「神感の至り」）を待ち、受け取るうとする雌伏の日々の記憶である。天命が下り、天日嗣（あまつひつぎ）にそなわつて、9段「掛ケ合」に、

直なるみ代に返るしるしも、思へば保ちし筐の徳、かれこれ共に時に逢ふ、

と祝福し合うのも、照日の前の認知と継体天皇の即位が、「かれこれ共に」、「筐の徳」によって実現したことを両者で喜ぶのである。実現のために、照日の前は物狂いの苦難を味わった。味真野の皇子とて無為に天命を待ったのでは、貴種流離譚の典型<sup>⑤</sup>と見なしにく

い。

ワキツレの使者は照日の前に、

わが君はきのふ都よりおん迎ひ下りおん位に即かせ給ひ、けさ疾く都へおん上りにて候、(2段「問答」)

と報告している。都からの迎えが来たその日のうちに味真野で即位し、翌朝直ちに上洛するというためのなき、照日の前を呼び寄せる間も惜しむ急ぎようは、置き手紙の趣向のため、ひいては照日の前を物狂いにするためとしても、継体自身にとっては待望の「神感の至り」であり、何をおいても「御本意」に応じなければならなかったはずである。

この逸早い行動力は、若々しい皇子像を、観客に想像させるであろう。ただし、『日本書紀』の皇子は、武烈崩御の年に五十七歳の高齡に達していた。即位後に皇后手白香皇女を迎え、後の欽明天皇を生むが、安閑・宣化の両兄弟はすでに四十歳を越えていたから、生母の元妃目子媛との関係も、それ以上の長い年月を経過していた。『神皇正統記』に拠ったとしても、父子三代の治世は、

(継体は) 天下ヲ治給コト二十五年。八十歳ヲマシマシキ。

(安閑は) 天下〔ヲ〕治給コト二年。七十歳ヲマシマシキ。

(宣化は) 天下ヲ治給コト四年。七十〔三〕歳ヲマシマシキ。

であるとされ、逆算すれば継体即位時の夫婦の高齡は隠れない。そういう老大王を、〈花筐〉ではいたいたいな子方が演じ、ワキの官人の庇護下に置く。若々しいというより、せりふもなく非力な外見は、親子物狂能の子方と変わらない。古作の〈海人〉に房前の大臣を子方が演じる先例もあるが、それとて母子の再会譚には違いなく、

〈花筐〉における子方の利用は、親子物狂能の類型から発想されたと思われる。しかし〈花筐〉のシテと子方は親子でなく、これは夫婦の恋の物狂能である。「奇怪な恋愛場面」と言うべきであろうか(10)。

本来大人の役をとくに子方に振り当てる理由は、一般には「能の主役一人主義の理論の一例証」として説明される(11)。〈花筐〉に当てはめれば、主役である照日の前一人に観客の注意を引き付けるには、対立者である恋の相手(継体天皇)の存在感を薄めておく必要がある、ということになる。それで大方の例は説明できるが、同じく世阿弥作とされる恋の物狂能、〈班女〉と〈水無月祓〉では、恋の相手は大人の役者が演じている。それなのに〈花筐〉ではなぜ子方を選んだのか。

その違いは相手役の名前に起因すると考えられる。〈班女〉の相手役は吉田の少将という創作人物、〈水無月祓〉の場合は名もない都の男、むしろ舞台上に登場しないことには、存在感が希薄なままである。逆に実在の継体天皇と元妃目子媛では、前者の知名度が後者を圧倒するのは目に見えている。〈国栖〉の天武天皇、〈安宅〉〈船弁慶〉の源義経にしても(どれも〈花筐〉以後の作品)、子方が演ずる大人の役に共通するのは、知名度の高さゆえの存在感であり、それが主役と相殺しかねないから、非力な子方の外見に矮小化するのであろう。

知名度の高い継体天皇を子方に振り当てることは、継体紀の「史実」から自由な役造型を宣言したに等しく、「史実」の高齡と外見の幼稚さの間で、観客の想像に方向を与え、狂女が慕うにふさわしい貴公子の像を結ばせたと思われる。同時に、恋する女主人公も「史実」から若返って、若女(画)・紅入(装束)の外見が似合わしい。照

日の前が再会後に安閑天皇を産むことは、再会時の若さと、したがって味真野での寵愛の短さを意味し、それゆえの關係の不安定さが、結局物狂いの苦難をもたらし、物語を進行させるのである。

子方の貴公子と年若い狂女の組み合わせは、親子物狂能(母親の年齢は深井面の中年が相当)ほどでないにしても、母子に見まがう体格の対比になる。そうすることでやつと、継体天皇の知名度の高さと均衡がとれるのかもしれない。しかし均衡にとどまっては、能の主役(「一人主義」的主役)たり得ない。外見どおり子方の継体を圧する存在感は、継体の信仰した天照大神を背後に負うことで、照日の前という名前が保証していると見られる。この名前があつて、主役は初めて主役の資格を得たと言うべきであろう。

#### 四 紅葉の御幸と物狂いの出会い

味真野における大迹部皇子の寵愛は、まだ子のいない照日の前の若さから、長期に及んでいないと推定される。ワキツレの使者の承知するところでは、

この程(一)寵愛あつて召し使はれ候ふ照日の前と申すおん方、(一)段「名ノリ」

と述べるのとおり、「この程」すなわち最近の寵愛であつたし、シテの照日の前自身は、

この年月のおん名残、いつの世にかは忘るべき、(2段「問答」)と述べて、「この年月」(大系・集成は「この」)数年と訳している」という言葉で、おそらく二人の關係が公然となる以前の時期を含めて、

振り返っている。

二人の關係はもちろん対等でなく、照日の前は召人(侍妾)のような存在であつた。再会・認知時にも、ワキの官人が、

おん玉章の恨みを忘れ、狂気を留めよ元のごとく、召し使はんとの宣旨なり(9段「掛ケ合」)

と宣旨を伝え、継体天皇は「召し使う」意識を公式にはまだ変えていない。女御への格付けが行われたのは、照日の前が安閑天皇を産んだ後であろう。

そういう關係であるから、継体天皇は上洛の際、照日の前を伴わなかつた。名乗り出た照日の前を、ただでは認知しなかつた。しかもまた、そういう關係であるのに、照日の前は捨て置かれても不思議なのに、継体天皇はいくつかの形見に誠意を残し、照日の前に、

されども思しめし忘れずして、おん玉章を残し置かせ給ふおんことの有難さよ、(2段「問答」)

と感謝されている。寂しい山里暮らしを共に耐えたのは誰であつたか。伊勢を拝む雌伏の日々を知るのは、照日の前をおいて他にいない。その気持ちだが、伊勢信仰の花筐を託させ、置き手紙を書かせたと思われる。

置き手紙(3段「文」)の前半(前掲)は、念願かなつて即位する、気分の高揚が感じられた。続く後半もその勢いで、神妙に秋の再会を約束している。

誘はれ行く雲の上、巡り逢ふべき月影を、秋の頼みに残すなり、「頼めただ、袖触れ慣れし月影の、暫し雲居に隔てありとも」と(二)「内は和歌の形」

この部分はすでに指摘されるとおり（大系等）、

わするなよほどは雲ゐに成りぬともそら行く月の廻りあふまで

〔拾遺集〕雑上、橘忠幹。また『伊勢物語』第十一段（12）

われはいさなれもしらじな春のかりかへりあふべき秋のたのみ

は〔新拾遺集〕春歌上、伏見院

の二首の和歌を踏まえて、雲居の月や春の帰雁のように、しばらくの別れを経て、秋には必ずめぐり合おうと、頼みに思わせる内容になっていく。花筐と玉章だけでは足りず、袖触れ合つて眺めた月をも、秋の再会までを耐えて待つよすがにせよと、継体天皇は書き置いている。自分の意志で残すのであるから、月影もまた天皇の形見には違いない。

こうして継体天皇は、秋の再会を確約した。書き置いた水茎の跡は玉章となつて残り、有明月に似て一人寂しく山里に残つた照日の前は、花筐と玉章を抱いて「花の跡」を慕う生活に入る。別れの季節は「花の跡」、つれなく春の去る頃であつた。『日本書紀』では継体天皇は元年正月に越前を發ち、遷都を繰り返して二十年秋九月に磐余玉穗宮に入ったとされる。〔花筐〕の継体天皇は晩春（三月）、磐余玉穗宮に直行して、ほぼ半年後の九月に照日の前と再会している（13）。

照日の前が形見の花筐と玉章を抱いて里へ帰つた（中入）後、季節は移り、後場冒頭の4段では、継体天皇の一行が紅葉の御幸に車を繰り出している。即位から半年の間は、新王朝の体制作りには忙殺されて、外出の余裕もなかったであろうし、皇居の造営も成つた今、そして秋の田の実（とみ草の種。すなわち稲）が実り豊かなこの季節に、

新帝の威光をあまねく実感させる狙いで、世間への顔見世に出たとも言える。継体天皇が照日の前に、ほかでもない秋を待たせたのは、このような時宜を予め見計らつたと推測される。

しかし待たされる照日の前からすれば、「まだき時雨」（6段〔掛ケ合〕の「初もみぢ」（4段〔上ゲ哥〕）とはいへ、九月は秋の終わりの季節、このまま昔沙汰なく、捨て置かれるかと不安に駆られるのも当然である。『万葉集』巻第十五、中臣朝臣宅守と狹野弟上娘子の場合は、男が越前（味真野）に配流され、女は男の「帰り来む時の迎へ」を待つた（目録には「夫婦別れ易く会ひ難きことを相嘆きて」六十二首の歌を贈答したとある）。〔花筐〕の継体天皇は即位を促す「時の迎へ」を、天照大神に祈つて待ち得た。照日の前も形見を手に面影を慕い、天皇からの「時の迎へ」を待つたが、雲居の月の隔たりは半年に及び、そうなつてみると、忘れまいとした寵愛の思い出も、相手が「かつ見し人」（14）（仮初めに契つた人。6段〔クルイ〕）のように遠ざかる。「乱れ心は君のため」（同前）、物狂いの旅に出て、「時の迎へ」を自分の力で引き寄せなければならなかつた。

折から南へ渡る田の面の雁が、越路の道しるべに頼まれる。玉章を懐中にした身には、蘇武の旅雁も心強い。しかし雁が飛び立つように、乱れ心にせかされた旅である。この旅を、次のように、天皇の約束を信じた行動ととらえたり、

「虚言あらし君が住む都」とか、結末部の「おん託言ましまさぬ君の心ぞ有難き」など、この曲には「頼めただ」という天皇の言葉への絶対的な信頼ともいふべきものが流れている。（中略）

照日の前は気丈な女性として描かれているといわれるが、天皇

への、天皇の言葉への強い信頼に裏付けられている照日の前の行動が気丈といってもよい積極的な能動的なものとして現われてくることは理解される(15)。

また自分で選び取った行動であることを理由に、次のように、

一方〔花筐〕のシテ照日の前は、行動的で理性的、きっぱりとした思い切りの良さがある。(中略)花子のようにひたすら嘆き悲しんでばかりはいないで、都の方へ渡っていく雁に想いを託したりしながらの道行も、どちらかというときと明るい(16)。

と論評したのは、照日の前の追い詰められた状況を見誤ることになろう。

「虚言あらじ」は、「秋にはいつも天空を雁が南に渡ることに嘘はあるまい」の意味で前文から続き、「君」に掛けて「君」の言葉に嘘はあるまいと否定したのは、照日の前の心に疑いが兆した証拠であろう。「おん託言ましまさぬ」君の誠意は、結末に至って確認されたことである。「天皇の言葉への絶対的な信頼」が揺らがないなら、照日の前はいつまでも行動を起こさず、味真野に座して「時の迎へ」を待てばよかった。しかし約束の秋は暮れようとするのに、「都よりの迎ひ」(2段「問答」)が下向する気配はない。事実、天皇は対面時に「おん玉章の恨みを忘れ」よと述べて(9段「掛ケ合」)、約束の不履行を認めている。

越路から玉穂の宮への旅は、したがって「明るい」道行であるはずがなかった。明るく転調するのは、はじめに述べたとおり7段以降のことであり、幸福な結末の印象を、さかのぼって5段の道行にも重ねるのは正しくない。

まず照日の前主従(侍女が連れ立つ)は、物狂いの風体が敬遠されて、道を尋ねても相手にしてもらえず、空行く雁を「頼りの友」(頼むの雁)とするほかなかった。「カケリ」の所作を挟んで、飛び立つ心で道を急いでも、その道の遙かさ、旅の困難が、骨身にしみるにつれて、

大和はいづく白雲の、高間の峰のよそのみ、見てや止みなん及びなき、(「サシ」)

ここは近江の湖なれや、みづから由なくも、及ばぬ恋に浮舟の。

(「下ゲ哥」)

焦がれ行く、旅を忍の摺り衣、旅を忍の摺り衣、涙も色か黒髪  
の、飽かざりし別かれ路の、あとに心の浮かれ来て。鹿の起き  
臥し堪へかねて、なほ通ひ行く(「上ゲ哥」)

と、遠くから慕うだけの及ばぬ恋の実感が増さるばかり、焦がれ行く旅に心も上の空となつて、別れた当初は祝意に紛れていた本音が、「飽かざりし別かれ」であったと吐き出されてしまう。照日の前にとつては、恋人のいる都に近づこうとするのに、かえって隔たりの大きさ、卑小なわが身の程を思い知る旅であった、と理解される。

照日の前の心の乱れは、目的の都に着き、御幸に遭遇しながら、御前を追われ、決定的な雲居の隔てを目の当たりにしたこと、一気に「クルイ」へと暴発する。当人も自覚する鄙の狂女の風体は、ただでさえ人目にとまりやすく、非形を戒め先払いする官人には、看過できない清めの対象と映ったらしい。官人は侍女の持つ花筐を打ち落とし、主従の抗議は言い募って、官人こそ物狂い、天の咎めを受けようぞと詰め寄る。その勢いで隔ての向こう(車内)に隠れた

継体天皇への思慕と、「ここへ来てだに隔てある」恨みを、泣き叫びながら訴える。

このように5段の旅の物狂いと6段の衝突による狂気は、継体天皇にも後ろめたい違約の恨み（おん玉章の恨み）に原因があり、及ばぬ恋の不安と焦燥、隔たりの絶望感が心を乱す基調は、二段にわたって連続し、頂点に至ったと見るべきであろう。原因が取り除かれずには、7段「問答」と9段「掛ケ合」の二度の宣旨を待たねばならず、それ以前の照日の前の心中には、天皇の言葉へのむしろ不審さえ、こうして頭をもたげ始めていた。

##### 五 認知の条件としての完璧な狂い

継体天皇が照日の前に残した形見は、毎朝の伊勢信仰に使った花筐と、めぐり合う秋まで月影を頼めと書いた玉章の二つである。共に大切に胸に抱いて（3段「上ゲ哥」）、照日の前は「時の迎へ」を待った。待ちきれずに旅立ったときも、花筐は侍女に持たせ、玉章も懐中していたようである（5段「一セイ」から推測）。8段の李夫人の曲舞を狂いおおせた後、宣旨により花筐を捧げ、天皇からは玉章にも言及があつて、「三元のごとく、召し使はん」との認知の論言を引き出した。

玉章はその全文を読み上げる行為が前場の中心をなし（3段）、代わって後場では花筐が、再会・復縁を取り持つ証拠の品となる（6段と9段）。玉章も最後の切り札には違いないが、それを照日の前が持ち出す前に、継体天皇の方で早くに思い当たつたらしい。

乱れ心は君のため、ここに来てだに隔てある、月の都は名のみして、袖にも移されず、また手にも取られず、ただ徒らに水の月を、望む猿のごとくにて、（6段「クルイ」）

泣き叫ぶ狂女が口にする「隔て」、「月」、「袖」の語彙は、かつて「君」自身が置き手紙の約束に組み合わせて用い、照日の前の脳裏に刻んで頼りにさせた言葉である。狂女は二人だけの秘密を知っていた。もちろん花を手向けて礼拝する皇子の姿も、そば近く仕えた者にしか証言できない。

玉章は別れに際して、初めてしたためられた。それが形見となり、別れている時間を耐えることができた。花筐は照日の前に譲る以前に、皇子が雌伏の時期を耐え、神に祈る道具として使われた。花筐を所持し、神に祈った結果、皇子は帝位に迎えられた。花筐を譲られた照日の前も、おそらく「時の迎へ」を神に祈り、そして願いは実現した。花筐を所持することで、二人の運命は開けた。それが花筐を「保ちし筐の徳」であり、厳密には玉章は除き花筐のみを、「恋しき人の手慣れし物」に限って形見と称するとされる（9段「掛ケ合」）。花筐を所持して行く手を遮った狂女が照日の前であることを、6段「クルイ」の終わり近く、狂女が泣き叫ぶ頃には、継体天皇はそれと気づいていた。気づきながらも、「面白う狂うて舞ひあそぶ」とを所望し（7段「問答」）、続いて花筐の実検に及ぶ（9段「掛ケ合」）のは、狂女を疑い、時間稼ぎをしたかったからではない。名乗り出た皇子時代の愛人を、泣き叫ばれただけで認知しては、周囲の納得が得られない。新王朝の門出となる紅葉の御幸が、このままでは狂女の醜聞にまみれてしまう。継体天皇にとつても力量が試される、

危険な状況が現出しているのである。仮に天皇の提案が成功して、行列を取り巻く祝賀の気分がかえって盛り上がれば、天皇としても認知に動きやすい。逆に狂女が失敗し、その訴えを天皇が退けるときには、王朝の未来にとつても不吉な事件となる。事態は照日の前一人でなく、継体天皇をも追い詰めて、二人の運命は照日の前の可能性に託された。

もちろん照日の前にとつては選択の余地はない。迷わず、

嬉しやさては及びなき、み影を拝みや申すべき、いざや狂はん  
もろともに（7段「問答」）御幸に狂ふ囃こそ、み先を払ふ袂なれ  
（7段「二セイ」）

と応じて、「隔て」を取り払う好機の到来を喜び、「御幸のみ先を清め」る役割を官人に代わって任ずる気概で狂いを始める。この狂いは心の高ぶりを伴う点は同じでも、自らの意志で、また侍女と気持ちを揃えて、舞い遊び囃すのであるから、5段の物狂いの旅から6段の「クルイ」にかけての、「狂気」や「乱れ心」に発する所作とは、はつきり性格が異なる。ここで求められていることは、続けて恨みを訴えることではない。「み先を払ふ」にふさわしい芸をしてみせることである。その成否が二人の運命を左右すると覚って、照日の前を選び定めた李夫人の曲舞を、慎重にかつ決然と舞い始めた。

「二セイ」の後、序奏舞として「イロエ」を挟み（以上7段、以下、「サシ」と「クセ」から成る8段の全体が、照日の前の演ずる李夫人の曲舞である。その冒頭にある「忝なきおん喩へなれども」の断りは、照日の前が恐縮して前置きするかに見えて、世阿弥の『五音』に亡父曲として記載する「李夫人」の詞章も同じ断りから始まるの

で、断り部分も含めて8段全体に独立した曲舞が挿入されていると見なければならぬ。そして、

物狂い（芸能者・曲舞女としてシテが狂う（芸を演ずる））のであるから、花筐の能とは関係のない曲舞が舞われるのが当然の所である。（大系補注）

という理解を基本とすべきであろう。

その上で、世阿弥が李夫人の曲舞を照日の前に選ばせた理由を想像するなら、

狂乱の段でシテの激しい恋慕が描かれた直後に、漢王と李夫人の深い愛情を語る曲舞が舞われれば、当然観客は、シテの悲しい身の上や心情を李夫人や漢王の悲しみに重ね合わせるだろう。

という計算が読み取れる<sup>(17)</sup>。ただし李夫人の曲舞の内容は、李夫人の心情に触れる部分はずかずかであり（衰弱の姿を恥じて面会を謝絶する姿勢のみ）、専ら死別を悲しむ漢王の嘆きと執着が語られている。李夫人は李夫人の曲舞の主人公ではなく、これは漢王武帝がいかに李夫人を愛したかを伝える物語である。

しかしそういう故事を、照日の前が長々聞かせるからといって、彼女の意図を、

内容的には漢帝の激しい恋慕・追憶を語って、今上の恩寵のわが身に及ばぬ愁訴として機能せしめ、（集成）

照日の前がこの「李夫人」を謡い舞ったということは、まさに李夫人に託して自分の存在を天皇の前に舞い謡い上げるところがあつたといえよう<sup>(18)</sup>。

漢王武帝の李夫人に対する激しい追慕の情を描く。このように

愛情をそそいでほしい、と天皇に願ひ訴える意味を持っている。

(新編全集)

と読み広げることには賛成できない。面会を謝絶した李夫人に自分を重ねては、面会を望むわが身の不遜が照らし返される。漢王と比べて天皇の不実を非難したのでは、天皇を困惑させるだけで、「み先を払ふ」芸能たり得ない。推参の無理が通るようでは、誰にも後味が悪からう。観客にとつても、最高傑作の評価は保留したくなる。ここは、

残された恨みや恋しさを直接的に訴える内容ではなく、李夫人を亡くした漢王の悲しみの様子を描いた古曲(観阿弥作曲)を選んだのである(19)。

という基本の理解に立ち戻つて、9段の幸福な結末とのつながりの中で、古曲選択の必然を探りたいところである。

その必然は、李夫人を愛する漢王の例を重ねて、帝王の慈愛の恵みを喚起させ、継体天皇の理想性を見物の人々に印象づける狙いからと説明し得るであろう。照日の前は6段が終わるまでに自分の心情は訴え切っている。8段でなすべきこと、天皇に求められたことは、延々と愁訴を繰り返すことではない。自分の立場は十分承知して、照日の前は李夫人の曲舞を演じた。演じて周囲に強調したのは恩寵の不足ではない。むしろ恩寵のありがたさ、忝さを訴えて、「み先を払ふ」役割を果たしたと見るべきである。この大仕事に照日の前はみごと成功し、晴れて認知を手中にしたが、認知した結果天皇も、「おん託言ましまさぬ、君のみ心ぞ有難き」(9段「哥」)の評判を世間に定着させることができた。

## 結び

世阿弥の物狂能は、親子であれ、夫婦であれ、愛し合う者たちの別れと再会の物語である。シテは別れが原因で物狂いとなり、物狂いの縁で別れた相手に再会する。この型の作品ごとに、世阿弥はどういう変奏を試み、種類を増やしていったのか。たとえば恋の物狂能の〈班女〉では、遊女と行きずりの旅人を組み合わせ、仮初めの契りの典型を作り上げた。遊女は宿を追放されて、再会の困難はさらに強化された。〈水無月払〉の妻も室の津の遊女(室君)らしく、迎えを待ちかねたすれ違いが物狂いの焦燥をもたらした。両曲共に再会がかなうのは糺の森の神前であり、神に祈誓してようやく奇跡は引き寄せられた。

〈花篋〉の場合は、男女が別れる原因を男の即位に設定した。男は実在の天皇、女は架空の女御である。男の名前は物語が継体即位紀の史実に准拠するかに見せて、一方安閑天皇生母の女主人公には虚構の名前と位を与え、天皇と国母という組み合わせでないと描けない、雄大な構想の恋物語を作り上げた。それぞれの流離の後、男が即位し、女が国母となる、これも稀有な再会の幸いは、天皇の祖先神天照大神以外に誰が保証できよう。

男は流離の間、女の存在と伊勢信仰を心の支えとした。女は侍妾に過ぎず、男の流離の間こそは華やいだ日々を送ったが、男の即位と上洛が女に流離の始まりを告げた。相愛の男女を別れさせる外側からの強制力として、これ以上きびしい状況は考えにくい。再会の

不可能性も極まった。極めておいて再会させるところが、世阿弥の物狂能の典型と見なされる。奇跡的なその再会を、《花筐》では、男から女へ流離の主体が代わる際に、流離に耐える加護の形見もリレ―して、「珍らしやこれはまた、契りを守る花筐」(9段「哥」)の徳が実現させたことにしている。大和歌を仲立ちに「男女の中を和らぐる」(同上)《昔刈》風の解決をあえて踏襲せず、世阿弥は典型を目指すと同時に珍しさも追求して、それまでの物狂能の到達点をさらに高みへ押し上げたと言える。

## 注

- (1) 日本古典文学大系『謡曲集上』《花筐》備考。  
 (2) 三宅晶子『歌舞能の確立と展開』(ベリかん社、二〇〇一年二月)所収の諸論。  
 (3) 山中玲子「女体能における「世阿弥風」の確立―《松風》の果たした役割―」(『能の演出 その形成と変容』《若草書房、一九九八年八月》所収)。  
 (4) 大谷節子「物狂能の変遷―放下能の誕生過程―」(『国語国文』52-10、一九八三年十月)・「物狂能の意味」(『国語国文』56-2、一九八七年二月) 参照。  
 (5) 徳江元正「作品研究『花筐』(下)」(『観世』38-10、一九七一年十月)。  
 (6) 卜部兼方『釈日本紀』卷十三には「上宮記」の系譜記述を引き、「継体天皇之祖考。上宮記之外。更無所見。」とするが、そこでは彦主人王(汗斯王)の前の私斐王(平非王)を彦主人王の兄とする

ので、親子関係では二人で一人分となり、『神皇正統記』のように応神を除外しなくても、また『愚管抄』のように私斐王を僻説扱いしなくても、応神天皇五世の孫に数えられる。

- (7) 水谷千秋『謎の大王 継体天皇』(文春新書、二〇〇一年九月)には、もう一例、南北朝時代の後光厳天皇の即位の際に「先帝の指名や讓位もなく神器もないままに、臣下の擁立によって即位した先例」として、『園太暦』文和元年(二三五二)七月・八月に継体天皇への言及があることを指摘している。  
 (8) 雄略天皇が吉備上道臣田狭の妻、稚媛を召したのが女御の初例(『河海抄』『謡抄』)。  
 (9) 徳江元正「作品研究『花筐』(上)」(『観世』38-9、一九七一年九月)。  
 (10) (11) 野上豊一郎「子方の舞台的效果」(『能 研究と発見』《岩波書店、一九三〇年二月》所収)。  
 (12) 大系・集成は『伊勢物語』を出典と認定し、新編日本古典文学全集『謡曲集①』は『伊勢物語』と『拾遺集』を併記する。『伊勢物語』では落魄する男が友達に忘れられないくない気味があり、『拾遺集』では愛人から遠ざかる男が女を安心させようとするかに読める。《花筐》の状況としては後者に近い。

- (13) 『謡曲拾葉抄』や『謡言粗志』は、『日本書紀』に磐余玉穗宮に九月に遷都したとあるのを受けて、《花筐》でも紅葉の御幸としたかと推定している。

- (14) 『古今集』恋歌四の巻頭歌、「みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ」に拠る。『俊頼髓脳』ではこの歌

に続けて、『古今集』恋歌五の「はながたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらむ教ならぬ身は」を掲げていて、両首が同時に世阿弥の視野に入った可能性がある。集成は狭野弟上娘子の歌と『古今集』のこの「はながたみ」の歌が〈花筐〉の構想の柱になっているとするが、竹本幹夫『観阿弥・世阿弥時代の能楽』（明治書院、一九九九年二月）所収「補説・「作り能」の初期形態」は、本文中に引用のないことをもって、両首とも構想上は「全く無関係」とする。引用しない以上、主題歌とはもちろん見なせないが、それでは味真野の地名をどこから取り込んだのか、『万葉集』の該歌の知識抜きに〈花筐〉の構想は論じられないと思われる。

(15) (18) 相良亨『世阿弥の宇宙』（ぺりかん社、一九九〇年五月）。

(16) (19) 三宅晶子『世阿弥は天才である』（草思社、一九九五年九月）。

(17) 注(3)の山中論文。